

研究ノート

景観の発見

環境情報の収集と応用に関する新しい試み

小林 徹

要 旨

地球上に広がる無数の景観の事例から記憶に残る世界各地の景観を取り上げて、新しい景観の見方、他の情報と組み合わせて出来る新しい知見について論じたい。

キーワ - ド

景観、距離、高度、視点、情報

はじめに

景観と言う言葉は地理学のみならず広く一般に使われる言葉であるが、景観の持つ意味についてあらためて考えてみると様々な内容をもった地表面の状態を表現していることがわかってくる。人間は誕生した瞬間から目によって周囲の状況を情報として記憶しはじめる。はじめは単なる形であるだけの情報がその量的・質的な数値の蓄積が時間とともに増大するにしたがって他の記憶された知識と合体して新しい情報の多様化をもたらすこともある。本題の趣旨は日常、何気なく見過ごす様な景観、何か意味ありげな景観、景観の規模の大小の違いがもたらす印象の違い、それらを人間は景観の存在に対してどの様な位置関係で見ているか、また、位置・高度の違いによって印象づけられる違いは何かといった諸問題、諸現象について記述したものである。旅行を通じてあるいは写真、映像等の媒体を通じて得られた景観を目前にして様々な想像を巡らすことは楽しい事でありまた時には予想外の役にたつ知見を提供してくれるものである。前出の〔目によって 〕について一言付け加える。本年4月、予想もしない目の病気に見舞われ、左眼の視力が減退した。加齢黄斑

変性症という病名であって、視力のよい老人で西洋人に多くみられ、日本でも40万人以上の患者が居ると推定されている。景観について考えるということも目が見えるという条件でいえることであって、見えないという絶対的ハンデキャップを背負った場合にはその本人にとっては意味が無くなるということではないかと考えるようになった。病気になって、はじめて健康のありがたみがわかると言われていることが身にしみて感じられた。同時に健康な右目で観察ができる内に景観のもつ意味について考察し、今までに体験し脳裏に焼きついている様々な景観の意味を再考してみたいと思う。

序 章

景観の定義；地上における自然、人間環境の具体的な様という定義がなされており、現実には都市景観、農村景観、あるいは景観保護法というような使い方をする。

本 論

1) 地物と観察者の位置、観察の内容の事例
景観を観察する人間の位置について考えてみる。ある景観から距離、高度といった単位で位

置づけられる場所に観察者がいる場合、単位の違いが彼にとって如何なる意味をもつかが重要である。幾つかの事例について考えてみる。今日の課題として、天体観測あるいは太陽系の惑星に機器を接近させる、人工衛星から地球を観察するといったことが科学技術の進歩によって可能になったが、このことは〔地球は青かった、月に印した足跡は小さいが、人類の偉大な一歩だ〕という言葉から始まって、今日の惑星の情報収集につながっているものである。有人宇宙船から撮影した地球丸ごと写真にはアラビア半島、オーストラリア大陸を中心とした地域が写っているが、地球儀をみる様に本物の地球景観を目前にして考えることはこの地域のどこかで今日も殺戮が行われているであろうと想像することである。一方では美しい自然、平和な生活を想像することもできる。地球の惑星である月に目を移すと、月のクレーター、山脈、谷の形成による筋状の地形から過去における水の存在を想定することがなされている。月にウサギがいるという神話的発想は否定せずにコンピューター画面に現れた月のあばたに科学者はいろいろと意味づけをするのである。隕石の衝突によってクレーターができたという推定は小惑星が球体として衝突した場合に月の表面に円形の窪地ができるという想像力によるものである。この仮説が定説になるためには地質学的実証が必要である。NASAのスペースシャトルから撮影した日本の神奈川県茅ヶ崎海岸の写真は全体に青味のかかった色合で、航空写真ではカバーしきれない地物全体の地理的分布を理解するための貴重な写真でもある。先般シャトルの爆発事故でなくなった米国の高校の女性教師は宇宙（空中という場合は地表面が見下ろせる1万メートル上空が限界）からみたカリフォルニア半島全体の景観を教材にして授業をしたいと希望していたのだが、生徒に与える国土の印象は地図とは違った強烈なものであったろうと想像される。日本国土、日本海、アジア大陸（ロシア、中国、朝鮮半島を含む）を一枚の地

図にまとめて東を上部になるようにして、地球の一部のように丸みを持たせた作図によって、日本列島がソ連（当時）の極東艦隊の太平洋進出に邪魔になるという趣旨の説明文をつけた米国国防省の地図が報道されたことがある。これの本当の意味は米国の戦闘機を日本に売却するために極東の軍事的危機感を煽るために利用された事例であった。日頃見慣れた地形図と違った日本とその周辺国の巧みな作図に関係者は錯覚を抱いたのである。アラスカ山脈の上空から眼下に広がる雪に覆われた大山脈パノラマは大地形がいかなる物理的作用でつくられたかという想像力をかき立てるものである。水平距離の遠近の違いがもたらす印象、効果と比較して高度の違いがもたらす効果はセンチ・ミリの単位であっても大きいものである。身近な例として自動車の運転席についてトラックと乗用車では視界の遠望できる距離は両者の高さの違いは50センチ程度であっても前者のほうが格段に遠くが見える。その結果として事故の発生にあたっては予見できる能力がトラックのほうが高いはずである。しかし、ある種の優越感が生じてくるから、その分だけ危険であるという指摘もなされる。自分が高い所に位置することの意味が問われることになる。消防署の火の見櫓は地上10メートル以上あって、恐らく管轄の地区全体を見張るに足る施設で防火に役立っていたであろう。戦場にあつては〔あの高地を取れ〕というのは勝利の重要な条件である。過去の戦争の多くははじめにこの作戦から行われている。日露戦争の203高地は有名である。

2) 大地形景観の観察と仮説

高地に視線を据えて地形観察をした結果、地形学上のこの発見、仮説等の発見がなされている。たとえば安定陸塊に属する盾状地といわれる地形は盾を伏せた形で、カナダの地形学者によって命名されたが、同じような地形がバルト海でも見られる。いずれも先カンブリア紀から続き、古生層が水平に堆積して地殻変動が少

ない。デービス（アメリカの地形学者、1850 - 1934）はダーウィンの進化論の影響をうけて、地球上の地形は幼年期 壮年期 老年期 準平原というように一連の変化を通じて変化するという仮説である。日本の山岳地形は壮年期の時代で、全体的に猛々しい様相を呈していると思われる。それに対してドイツのペンク（1888 - 1923、物理、地形学者）はデービスの侵食輪廻説に批判的であったと言われ、これは恐らくヨーロッパの地形を概観して得た結論ではないかと思われる。

教科書では一つの仮説が一人歩きして定説扱いになることがあって、それだけを権威あるものとして説明しがちであるから、常にダブルチェックする必要がある。前出の楯状地にしても、周辺が高い地形という言い方もあって、この場合は海上から見渡した景観の説明みたいで、観察者がどこにいるかが問題である。ケスタといわれる非対称的地形がパリ盆地、ロンドン盆地にみられるが、これも高度の高い位置でなければ観察できない。

3) 鳥瞰図とナビゲーターシステム

鳥瞰図といわれる地図は鳥の目からみた図法で立体地図状であり、地域全体の景観を一望できるが、影の部分は想像の域をでない。そこで地形図は地域上空から地表に達した平行光線で立体外観が地表に投影されたと仮定して一定の図法で作図され、利用者は抽象的景観をみて利用することになる。立体の平面への作図は等高線図法の発明によって解決された。近年著しく技術革新が行われている自動車のナビゲーターシステムは24個以上にもおよぶ人工衛星の電波を受信して地上の位置確認をおこなうシステムであるが、人間の五感を機械的に拡大して居ながらにして地理上の位置を決定可能にすることは応用範囲の拡大という点で想像を絶することである。初期の実用化で米軍の湾岸戦争時における砂漠の兵士の地理的位置の確認に用いられた。その後民間に広く応用されるようになって

から、米国は衛星電波の地球到達精度をずらした。その結果魚群探知機に応用すると魚群の位置が違ってくるといった問題が発生した。しかし勝手に他国の電波を利用するという言わば他人の禪で相撲をとる訳で文句を言える筋合いではなかった。15世紀のメルカトル図法が今日でも利用されている一方でハイテク技術による作図が新しい利用分野を開拓することになっている。エベレストの標高は毎年数センチ高くなっていることも観測可能である。巨視的に景観を見ようとする場合、360度の全方位から観測することは鳥瞰図の視点であって、コンピューターによる画像処理で可能である。二次元の画面に立体感のある景観がかなりの精度で作図される。

4) 微小景観、地球儀、地図の特異な見方

一方で景観とは言いがたいが、観察する位置によってまったく違う印象、研究結果の違いが生じるものが植物の葉である。広葉樹を例にとると、葉を観察する位置によって、面として、線として認識される。面の場合、表裏の観察結果は一目瞭然のちがいを表すが、顕微鏡による細胞の配列などを観察すると、そこには葉の形態とは似ても似つかぬ円形、線形の模様の複雑な配列が観察される。それらから得られる情報は、形態の分類（多くの学問は分類学から始まっている）よりはじめて、やがては一本の樹木の生態から樹林帯の生態学へと発展し、地上における分布の特性へと継承される。一本の樹木をどう見るかということの違いが人生観の違いにも繋がることをゲーテは指摘している。ゲーテは人間の感性を重んじながら森の中の神秘的空間に何か感じるものがあったと思われる。前出の地球全体の景観は実は画面の中心地域国の国民にとってはいろいろな国家観にむすびつける要因を提供する。今日の世界地図を想像していただきたい。どこの国でも自分の国家を中心に描くことが普通である。北が上方である。ただしオーストラリアでは南が上方である

地図がある。これは自国の説明に都合が良いということが理由にあげられるが、世界の中心であるという愛国心の宣伝にも一役かっている。これはその国が世界の文化、文明の中心であるという意味ではないが、簡単に陥りやすい錯覚であるだろう。1940年代、戦争初期のころ京都大の地理の教授で、日本のアジア支配の正当性とアメリカ合衆国のロッキー山脈を分岐点として西は日本帝国、東はナチスドイツが支配するという絵空事を教えていた者がいたそうだが、地図の利用の一つであると同時に、いつの時代にも時の政権におもねる御用学者がいるという事例である。世界観の形成に地球儀、地形図が果たす役割は大きく、実際の景観と照らしあわせてみることは、今後の生活、旅行、災害等の対策に必須の条件である。地図を眺めて誰しもが気づくことの一つは海陸の分布は一様ではないということである。そこで地球儀の見える部分の中心にニュージーランドをもってくると周辺は海洋の占める部分が多くなってこれを水半球という。また中心にフランスを持ってくると周辺は陸地の部分が多くなり陸半球と呼ぶことにする。このように大きな地球の地理的位置にいろいろな名称をつけて分類することが理解を早めるひとつの方法である。北半球、南半球というのは赤道を界にして考えたものである。これから南北問題という政治的課題の議論がなされることになる。他の着想は例えばアフリカ・南アメリカ両大陸が過去のある時期には繋がった一つの大陸ではなかったかという仮説である。恐らくかなりの人間がそう考えたふしがあるが、この仮説を発表したのがウエーゲナー(1880-1930、ドイツ人地球物理学者)で、大陸漂移説として世に問うた時には誰も本気では考えなかったと言われる。この仮説は、古生代末期までは世界の大陸は一つの大陸であったが、太陽、月の引力、地球内の熱エネルギー等によって大陸の弱線にそって分裂したという説である。この奇想天外な仮説もその後の地形の各大陸の連続性の解明、植物の分布の状況、地

質構造の同一性等の実証的研究によって今日では仮説ではなくなりつつある。ヒマラヤ山脈はかつて海底にあったが(アンモナイトの化石の発掘で実証される)アフリカ大陸東岸から分離したインド大陸が現在のインドの位置に数千万年かけて漂着し海底を押し上げることで形成された褶曲山脈で、現在でも年数センチ位標高が高くなっているという。この動きが地震の作用としてインド北方・パキスタンのパンジャブ地方に大きな被害をもたらしている(1906、2005年10月)。ネパールの河川を観察すると、河岸の露出した地層が丁度重ねた布団を両脇から押すことで生じる歪んだ構造体として観察される。大陸すら動かす物理的力を地球は持っていることを実感する。ヒマラヤ山脈南斜面、インド大陸北端で東西にのびる断層崖の地学的観察、観測は地震その他の災害対策面からみても重要な課題である。

5) 私的観察事例

自分で飛行機を操縦できれば任意の上空から地上を観察できるという欲望にかられて40年前に一時操縦練習に時間をさいたが、その折りに観察した事例を記述する。野尻湖上空では付近の関川という一級河川から揚水して湖水に混入する河川水の濁り方が見事に黄色の帯状を示し、扇形に拡散する様子が観測された。このことは湖水面をボートで走行するだけでは観察困難なものであった。東北山間の沼沢湖は周辺の山々に囲まれたカルデラ湖であるが紅葉の頃の全体像は上空からの観察を一段と色彩の豊かな景観にかえてくれた。

北海道の有珠山の噴火の後で山頂周辺と洞爺湖の景観観察では山腹に新しい植生群の発芽がみられた。噴煙の熱とガスの存在が植物に影響を与えていることが地上観察の結果と合わせて議論された。その生育状況は噴火以前と比較すると小さい発芽状態であると言われた。このことは山火事の効用という研究発表と関連するものである。山火事が人間社会に与える悪影響は

常に議論されるところであるが、自然発火による場合には新芽の発芽作用に欠かせない自然の刺激であって、みだりに消火する必要はないということである。乾燥大陸のオーストラリアでは山火事のあとのユーカリの樹林を観察すると、そこここに新芽の発芽がみられることがある。火のもつ神秘的な効用の一つであろうか。冬季筑波大学の教官と大学周辺の上空から家屋の屋根の残雪の様子を観測した結果では南北方向に傾斜した屋根の勾配の僅かな違いで薄く残っている雪と乾燥した屋根の状況が見事に区別されていた。これは日射量が屋根の勾配の違いで南北の単位面積当たりの受熱エネルギーの違いとして現れた結果である。風の影響も考えられるが、その時の屋根の景観は雪の白色と屋根の色のはっきりしたものであった。当時（1970年初頭）多摩ニュータウンの周辺開発でブルドーザーのすさまじい威力とともに、酷く削り取られた山腹の様子が上空から広い地域にわたって観察されたが、この開発（一見して森林破壊）の仕方をみていると、地域全体の都市と自然のバランスを考えた開発の理念は無いように思えた。つまり森林、傾斜地、蛇行する河川、湿地等はすべて開発の邪魔者であるという思想である。しかしこれら自然は酸素の供給源、保水能力としての森林、降水あるいは地殻変動の結果としての地形、緩やかに流れる河川水は地質構造の違いで蛇行し、水の地下浸透その逆の浸出と降水の流出の役割、湿地は水の浄化作用、生物の住処で人間でいえば粘膜である等々これらは今も昔も変わらない事実である。今日の問題の悪化の一路をたどる状況はかつての乱開発のツケであるといえる。空から眺めて分かるような開発は今後は不可能であると同時に、重いツケがこれからも我々を悩ませることになる。

超低空飛行は地表面の細部にわたる景観観察に適している。さらに幾つかの事例を記述する。ハドソン川上流のラインベック（ワシントン将軍がアメリカ独立戦争時に軍隊の訓練をお

こなったというアメリカ最古のピークマンホテルがある）において超低空飛行が可能な1920年代後期の複葉機から見下ろすハドソン川流域の田園風景と元米国大統領ルーズベルトの広大な屋敷はアメリカの田舎の豊かさを表す景観である。グリーンランド南端の氷河の温暖化によると思われるクレバス（斜面を覆う氷河が溶解する過程で生じる深い垂直状の亀裂）が斜面に対して直角方向に無数の裂け目として観察され、超低空飛行は恐怖を感じるものであったが、その氷塊が海面を漂流すると全体が青色に輝いて、いわゆる小氷山としてさらに神秘性を増すことになる。極北の海域は数時間の体験であったが夏期でも肌をさす空気であったのが印象的であった。この氷河の消長を研究すると地球温暖化の実態が把握可能となる。1930年頃スイスアルプスの氷河の末端に積雪観測のポールがたてられたが2000年になって末端は100mほど山腹の上部に移動した。つまり温暖化の証拠である雪氷の溶解である。スイスの山岳景観を彩る雪氷は温暖化の他に山間の別荘の増加と自動車の排気ガス熱が影響して溶解し続けることである。気候的に逆になる砂漠の上空では平坦に近い地形で褐色の砂礫が無限に続く景観である（スイス ケニア間の空路）。石油のパイプラインを想像させるラインが直線状に続く。一見ただけではパイプラインと断定出来ないが国境であるとも思えない。ただアフリカ諸国はかつての宗主国の都合によって直線的国境線（数値国境）が引かれているから砂漠を横断する壁みたいなものがあると想像することは出来る。ケニアのモンパサ海岸は白砂を敷きつめたようなインド洋に面した観光地である。ここに至る空路ではケニア山が目前にせまり、南洋の山岳景観である。ユーラシア大陸の東端のヒマラヤ山脈の景観はネパールの中心にその威容をみることが出来る。マウント・エベレスト（チョモランマ）は近くの山脈の威容におされて小さな山頂としか見えなくてこれは遠距離による目の錯覚というべきである。

6) 大地形の特性に関する事例

ヒマラヤ山脈を界として東を常緑広葉樹林帯、水田地帯と考え、西側を乾燥小麦、牧畜地域という大まかな文化圏の違いを想定することが出来る。このような高い視点から日本では糸魚川・静岡構造線（フォッサマグナ、大亀裂帯）という大地溝帯の存在が指摘された（ナウマン、ドイツ地質学者、1850-1927）。これは本州の中央部を南北に分断する地溝で、東北日本、西南日本に地形的に区分するものである。

この地溝帯に運河を掘って日本海と太平洋を結んだら水運が活性化されてアジアの経済に良いのではと提言したパナマ人がいたが、彼の真意は日本がパナマ第二運河の築造に盛んに意見を出していた時に大きなお世話だという意味で皮肉を込めて述べた意見である。ついでながら、アメリカ人の意見として運河掘削には水爆の破壊力を利用すればよいと言うのがあった。大国意識丸出しの考えである。アンナプルナ山頂の雪を照らす早朝の太陽光線の変化はそれを見る人間の心に神の存在を認めさせる神秘の力をもっている。これはポカラ北方のジヨムソンキャンプベ - スからみた景観である。いわゆる森林限界（3,000メートル）までは森の神様、それから上は雪と氷の神様の支配区域である。ヒマラヤから西方のヨーロッパに至るとアルプス山脈の景観になる。どちらも新期造山帯の地質時代に属する険しい山岳景観を呈し、ユングフラウ、マッターホルンが観光地として知られている。登山電車で標高を稼ぐときに樹林帯の変化と牧草地帯のコントラストは絵はがきの景観である。牛の放牧はスイス政府の肝入りで種類や頭数がきめられているとか、とにかく景観の保全是スイス観光の神髄である。なお登山電車は曇りの日で、ミルクに顔を突っ込んだような何にも見えない状態でも金だけはしっかり取られるからご用心のほどを。富士山のふもとのあるホテルは冬季に富士山が見えなかったら金はいらないという話である。これは国際地理学会の時の話である。

7) 森林景観

イギリスの西部、ウェールズの植林地の山腹から山麓を見下ろすところで、あるイギリス人の説明によると植林された樹木景観は最悪である。なぜなら、同じ樹高の樹木で、鳥や獣の種類が極端に制限されて本来の自然の様相がそこなわれている。これは政府の政策が悪いからだという事である。ついでながら、単相林は害虫に弱く、自然の生態系をそこなった人工的森林形態で土壌保全、土壌水分の保持等の能力に欠ける部分がある。人類の文明の進歩にともなう森林破壊は1万年前の放牧から開始され、今日では1分間に10haの割合で破壊が進行しているといわれる。従って植林という作業は今後も世界各地でおこなわれなくてはならない。温帯林、冷帯林、熱帯林の林相はいずれも上空から上部景観として観察しているが、温帯林は針葉樹、広葉樹の混交林、冷帯林は針葉樹のみの単相林、熱帯林は広葉樹の多種林である。熱帯林は古来から薬用植物の宝庫で現代でも発見が続いている。アマゾン地域では破壊の現状が報告されており、道路建設、焼き畑、牧場の拡大が問題視されている。かつて森林破壊の原因の一つとして日本はアジアに於ける割り箸の用材伐採、ヨーロッパは棺桶用のマホガニー材の伐採（スイスは用材を北方材に変えたという報道があった）、アメリカは南アメリカで牧場用の森林伐採が多いという指摘である。宇宙からみた地球で目立つ景観の変化は、都市の火、焼き畑の火、漁船のかがり火、石油地帯のガスの火である。人間活動の証であると同時に環境問題の新たな課題として子孫にツケをまわしていることでもある。

8) 砂漠の景観

砂漠（岩石砂漠、砂砂漠）の景観についてアラビアの油田の発見にまつわる話題の一つ。

20世紀初頭、イギリスの支配がアラビア半島におよんでいた頃、あるイギリスの山師がレストランで食事をしながら外の景色を眺めてふと

思いつくことがあった。その景観は以前石油を掘りあてた地域の地形と良く似ている。ならばここでも石油がでるだろうと直観的に閃いた彼はそこを支配するアラブの酋長に多額の金貨を支払って採掘に成功したという話である。今日われわれが享受している無数の工業製品はその原料、燃料の発見時においてはかなりあてずっぽうの考えで行動開始がなされ、多くの人命と無駄な消費の結果成し遂げられた成果であるということ忘れてはならない。大陸の発見はいい加減な地図と金と権力者の欲望の上になりたっていたであろう。今日では国家が権力者の代わりをなしているが、往年の海賊時代はさぞ面白い時代であったかも知れない。現代の若者に青年の覇気が感じられないというのは時代背景の結果であるとも言えよう。

9) 変化する景観

一方、中ないし大地形を連続して変化する地形としてとらえるためには5,000メートル前後の高度を飛行することが必要であるが、同時に雲の形と分布の様子を観察しつつ地上の土地利用の変化をみると興味深い観察結果がえられる。サンフランシスコからワシントンに至るほぼ西から東のコースをたどるとそのことがはっきりする。ロッキー山脈の西側では森林を含んだ乾燥地域がひろがり、灌漑施設は緑色の円形の畑として存在している。これは散水施設が耕地の中心にあって回転しながら散水するため、上空から円形に見えるためである。耕地と放置された土地の土壌景観はきわだった違いをみせている。水の存在と植生の関係がいかに重要かが観察できる。ロッキー山脈以東から西経100度までは砂漠に近い景観が連続しており放牧地域である。西経100度にそって南北方向に年降雨量500ミリの等雨量線が存在し、ここを界に東側では年降水量が増加するので景観も森林、農業地域の様相を呈する。約5時間余りの飛行で合衆国の北緯40度線にそった景観の変化が観察される。ワシントンにおける一時的な集

中豪雨は凄まじく、飛行中止となることがあったが、こんな集中豪雨は西海岸（西岸海洋性ないし地中海性気候）では冬季を除いてはほとんど無い。小型の飛行機からみた外国の地上景観の事例としては、ニューギニア低地の蛇行する河川とデルタの発達した河口の湿地帯、ニュージーランドのクイーンズタウンの湖（複葉機による宙返り飛行の体験）、マウントクック山腹の氷河地帯への着陸と目前にせまる雪山の壮観な眺め等が印象深い。

10) 水環境に関する課題

一方太平洋を南下する客船が赤道を航行するとき、自分は大洋の真ん中において孤独であると感じる。大勢の船客がいても船首にたてばそのような感覚になる。水平線をグルリと一周して眺めると地球の丸さを感じるのであるが、これは想像上、あるいは地球は球形であるという知識からくる錯覚であるかもしれない。孤独に耐えることの苦手な私にとって単独ヨットの世界一周体験の成功者の神経の太さには脱帽である。最近14歳の日本人が太平洋横断をなし遂げた記録を読んで、その精神と肉体の強さに敬服した。人間には10歳前後で各種の偉業を成し遂げる天才的能力をもった者がいることがわかる。天才といえばモナリザの絵画で知られたレオナルド・ダ・ビンチの多彩な研究の中で水循環の概念を彼が観察した、或いは知識として習得している水の動きから作図しているが、その想像力も敬服すべき事の一つである。ついであるが彼が考えた水循環の中で、山頂から流下する河川水の水源は山頂にいたる地中の水路を逆上っていく水によって供給されるという仮説である。海から蒸発する水が雲を作るという概念は図中に示されているので、水路の話は現代的に考えれば間違ではあるが、だからといって彼の天才的偉業を損なうものではない。(5)彼のアイデアを記したレスターノートの本物はビル・ゲイツの所有になるが、コピーを購入したのでそこに書かれた図面から、ダビンチの逞しい発

想の素晴らしさを学びたいものと思っている。海は存在は人間に様々な人生模様を提供する。この海に雲、太陽を結びつけると、マニラ湾の夕日、ゴーギャンの愛したタヒチの夕日、長崎県佐世保の大村湾のサンセットということになる。太陽光線の微妙な変化、雲の形と刻々変化する色彩、雲間から照射する光線の神秘的光景は宗教画によく見られる景観である。ハワイのオアフ島で山の斜面にかかった大きな虹は長時間観光客の目を楽しませてくれた。やがて消えゆく景観であるが、地上でみるのが多く空中では如何様に見えるのであろうか。空中景観としてはオーロラ、層気楼を見たいものである。芸術家ならずともかなりの感銘を受けるものである。しかし感性は人によって様々であって、秋の紅葉でも(死んだ生物に美しいものがあるだろうか)という人間もいるので、美しさの強制はできない。その点では前出の地形論争の様に理科系の人間同志では仮説が実証できるまでは感情抜きで議論できる機会が多いような感じがする。しかし人間性に欠けるという批判が再燃するかもしれない。あたかも宗教論争の如くである。

11) 都市の景観

ここで都市景観について考えてみたい。見る位置としては鳥瞰的位置であって、高くてもビルの屋上位であるが、近年は高層ビルの展望台が人気である。昼間よりも夜間照明における都市景観が見物である。日本人の海外観光客の増加の原因は様々であるが、その国の建築様式に興味をもつことが理由の一つに上げられる。建築は歴史的現代的といった時代の異なることで外見上統一性のある景観を呈する。具体的には高さ、屋根の形状、色彩、外壁と窓の形式、建築材料の統一性、使用目的等である。西欧諸国では歴史的建物の改造は内部のみという法律があるらしい。ドイツのニーダーザクセン州のオスナブリュックという9世紀以来の古都(4キロ平方の地域)に住む友人の家屋も屋内の改造

によって外観が保たれ、町内はおとぎの町の景観である。看板の規制は近代国家の課題の一つであるが、これらの規制が日常的に遂行されるためには住民が相当の統一意識をもたなければ実行できない。したがって、保守的な一面が強調されることもある。町並保存という意識、政策が施行された地域では世界遺産という枠を作って建築物の保護を行うことが世界的におこなわれているが、住民の居住を続けて保存も行うということは大変な仕事であるということをして白河郷の現地を見学して痛感した。茅葺き屋根の農家の統一された農村の景観は保存するだけの価値があることを認める者であるが、住民の忍耐と金銭的援助、保存技術の温存、法律の保護等がどのようにして継続するかが政策の成功にかかっていると感じた。京都が古都の一つとして奈良と並んで有名であるが、どちらも連続した町並みとしての景観は無い。神社仏閣の建物は確かに観光資源として、或いは歴史の証人として保存されているが、継続した温存の努力は大変である。以前、日本文化の理解者として古い民家を移築して四国に住んでいるアメリカ人の京都の現状を憂う論文を読んだが、まさに近代都市への移行によって京都の町並みが破壊されたと感じていることがわかった。新京都市の建物は賛否両論であったし、河川にフランスから橋を移築する話も聞いたことがある。評論家的に言うならば京都の住民を中心とする町全体の総合開発に関するマスタープランがあったら景観の様相は今日とはちがっていたらうと感じた。かって戦国時代に多数の死者を弔うために寺院が必要とされ、その時代の建築技術によって統一した概観の建物が出来たのであって、当時と今日に生きる人間が違っていることにも配慮が必要であるという近代化の非難に対する批判もあることも知っておいてよいことである。教会の建物もその国の文化レベルを表す指標になっている。パリの骸骨のつまった地下博物館は異様な雰囲気と感じる一方で、現代は異なった意味合いを持つていると解釈すると、

古今東西の神社仏閣に対する思いも新たになるものと思う。一般的な感じ方であるが、西洋人の中には保存本能が日本人より高い(多い)人間が多いのではないかという見方、収集癖の強い人間が目立つといった感想をもっているのであるが如何であろうか。ワルシャワの町はドイツに破壊されたあと、レンガを丁寧に積み上げて元の建築を復元したという。ドイツのドレスデンも同じ手法である。

木と石の文化の違いであると簡単には割り切れない何かがあると思われる。ともかくこの石の文化の国々をめざして日本人は出掛けるのである。建築にかぎらず例えば古い飛行機、船舶、自動車といった物を現在も使用している事例が多くみられる。ボストンの植民時代の煉瓦の建物、パリの石灰岩の黄白色の統一された建築、ロンドンの煉瓦の建物、鉄を材料としたベランダのデザイン、真鍮の把手、等きりが無い。翻って、東京の町並みは高層ビルから展望するとカオス(混沌)状態である。しかし途上国からの観光客にはダイナミックで活力に満ちた都市として評価する。たしかに戦争で一面焼け野原となった東京は考えようによっては無料で解体屋を頼んだ結果と言えなくもない、木造の家屋は灰塵となって再建の空間ができたのである。ミュンヘンを訪問したとき小高い山があって、これは破壊されたレンガを積み上げて作ったとの説明をうけたことがある。しかし町のデザインはそんなに変化していない。近年の統一ドイツの首都ベルリンの近代化は革命的であるらしい。らしいというのは、ベルリン訪問が35年も前であることによる。ロンドンの大火のあと煉瓦中心の町並みが出来たということから、必要とあらば新しい酒は新しい革袋にという思考も存在することが理解できる。ニューヨークでは100年前のニューヨークの写真集にあるのと同じ建築が多数みられることは歴史の浅い国の特徴という見方だけでは正確ではない。ついであるが、この町の古いビルの屋上には木造の水槽(水タンク)が沢山散見されるが、これらの

タンクは、ポーランドの移民の風呂桶屋の手になるそうで、現在でも作られているらしい。この特徴は30年位でぶっ壊して細い板としてせまい階段でも運搬出来ること、夏期には水が蒸発するため水道水が冷たくなる(蒸発熱がうばわれる)利点があるそうである。このことは日本の写真家が気がついて述べたものである。ニューヨークはアメリカ嫌いの人間も一置く町である。人種の多様性が今日のニューヨーク文化を形成していると見てよいであろう。日本も必要のない近代建築はやめてロ・テクの利点を再考の上実生活に活用すべきである。建築における木材利用は内装面においても和室、洋室を問わず重要で、温和な精神の発達の為の要素が多いのである。いわゆるキレル人間がどんな家に住んでいるか調べる必要がある。石の文化という一面的に区分けされる西洋の方が殊更に木材利用の事例が多いことを知っているだけにこのような意見を述べるのである。

12) 港湾の景観

港湾の景観は活気に満ちた人間活動の場として見る者を圧倒すると同時に歴史を忍ぶ材料でもある。オランダの港湾はロッテルダムを中心として船で周遊するとその威容に圧倒される。オランダはEUの運輸部門において屈指の実力を有していることからその規模は大きい。翻ってハワイの真珠湾を数キロはなれた丘から眺める、佐世保湾を弓張の丘から見下ろすというロケーションでは軍艦を中心とする景観がやや重苦しい景観として目に入ってくる。戦時中ならスパイ活動である。ハワイでは1941年の日本軍の攻撃機が小高い山腹の間を縫うようにして湾内に突入する状況がわかる海面に戦艦ミズリー(1945年9月2日、この艦上で連合軍と日本の代表による降伏調印がおこなわれた)が投锚している。佐世保の西海橋付近の土地に三本のコンクリート柱が立っているが、この柱は1940年当時の無線塔であって、ここからハワイ攻撃の(ニイタカヤマノボレ)という暗号が発信された

といういわくあるものである。この両地域を知ることができたことが一つの歴史を知る動機になった。

13) 特異な自然景観

自然景観で特異な形状の事例では、中国の桂林とオーストラリアのエアーズロックである。前者は3億年前には海底であった地質構造が隆起して、侵食をうけて石灰岩層が溶脱して、のこった巨大な柱状の山が植生の繁茂によって奇怪な山岳景観として存在する。河川の小型船から見上げると山頂近くの岩盤が露出し、露頭が水平に堆積した地質構造として観察され、このことから過去における海底の隆起を想定することができる。山頂から河川の河床までが浸食された標高ということになる。この地域はセメントの生産も盛んである。鍾乳洞の観光資源としての役割も大きく、あらためて広大な面積を持つ中国の底力を感じたものである。日本の鍾乳洞と地表に露出して羊の背中に似た景観を特徴とする石灰岩地域は山口県の秋吉台である。終戦後（1945年8月）資源不足からセメント材料として開発の運命にあった地域である。当時文化財保護委員会の委員をやっていた父が開発反対の意見であったように記憶している。群馬県の尾瀬が原も電源開発で人工湖として湖底に沈む運命であつたらしい。今日、双方とも自然景観として保存されているのはご同慶の至りであるが、そのかわり、セメントは輸入で、輸出国の自然破壊を促進しているし、電気は原子力でその核燃料も輸入で、同じく鉱山労働者の放射能障害が心配される。いずれにしても文化生活は犠牲が伴うことを教育しなければならない。一方オーストラリア、ノーサン・テリトリーの一枚岩のエアーズロックは大平原の真ん中に禿山のごとく鎮座しているという感じで、隕石ではあるまいかという仮説もあったが、周辺が侵食されて残った固い岩盤であるとみられている。アボリジニーの聖地である。342mの山頂まで鎖がつけられており、山頂にたつと平原が

360度展望でき不思議な感覚に捕らわれる。世界でも珍しい地域である。平原からは太陽の動きによって山の色彩が変化する。これは紅富士といわれる富士山の色彩の変化に似ている。山岳が信仰の対称になる理由のひとつであろうか。フィヨルド（氷河によって削られた海岸地形）の景観はノルウエーのソグネフィヨルドとニュージーランドのそれが印象的である。前者は雪を頂いた山岳氷河がせまい湾内の岸壁へとせまり冷たい海水によって北の気候の厳しさを実感する。氷河によって運ばれたモレーンとよばれる岩石塊が点在する。かつて氷河が存在した地域にのこるモレーンがチュ・リッヒで見ることができる。沢山のカモメの存在も景観の大切な要素である。後者は峡谷そのものという感じでアザラシが観光客の目を引く。南米大陸南西岸、グリーンランドでも広範にみられる。滝の景観ではナイアガラのみが体験対象である。滝の落下地点にゴムボートで接近すると息がつかまるような壮絶な感じである。滝の真ん中でカナダ・アメリカの国境線が存在する。この膨大な水量の一部がイスラエル・パレスチナにあつたら紛争も軽減できたであろうにと想像する。南米のイグアスの滝は映像のみでしか知らないが、経験者によるとかなり話が巨大化して伝わる様である。ともかく、水の分布と人間の分布が不一致であることが紛争の種の一つである。

まとめにかえて

景観の観察、観測を通じて人々が感じることは多様である。どれが正しいということはない。しかし歴史における沢山の事実を通じて見えるものの一步先を洞察してみようとする少しの努力が何かを生み出すだろうということはご理解いただけると思うのである。世界にひろがる有限の空間を64億人の人間が観察すればそこで何が起きているか理解できるだろう。その地域に行けなければ、報道番組に頼ってもよい。多少の知識があれば、地震の現場写真からでも貴重な情報をとることができる。昭和の初期、

アメリカの野球選手の一団（ペーブルスその他）が来日し、浅草の仲見世で写真を写した。それは日本の工業力を推定する資料になったそうである。グループの中にスパイがいたということであった。アメリカもやるもんだという感想であるが、この情報を取る、分析する、応用する、管理するという事にかけて日本は世界最低の国であると思っている。つまりハードは良いがソフトがだめという事である。ともかくその意味で景観が持つ数々の情報を積極的に把握することを願っている。無知でいることほど怖いことはない（自分だけ情報を知らない）。同じ失敗をくりかえす人がそれに該当する。現在日本では地震の予知がほとんど出来ない。台風並の予知が出来るようになったら日本も一流の文化国家といえることができるであろう。日露戦争前、ロシアの艦隊が瀬戸内海に來航した時、周囲の山々の山頂まで耕された畑をみて日本の貧しさを感じ取った。一方、日本人は軍艦の大砲に洗濯物が干してあるのを見て軍人魂の欠如を笑ったという話がある。現代人の若者の意見が聞けたら幸いである。日本は豊かな半病人によって構成されているのもう少し昔の貧しい健康人にと変化したいものである。今日的課題である環境問題の解決のためには周辺にみられ

る景観の異常を見いだす努力が必要である。景観は地球の表現形態であり、自然的人工的を問わず未来永劫大切に保存されるべき物体である。したがって地球自体が世界遺産に登録されるべきものである。自然遺産、人工遺産の両面から登録されれば各国は地球を大切に保存する義務を負うことになる。結果として平和を維持することになる。荒唐無稽という前にこの提案を吟味すべきである。

参考文献

- 1) 梅原 猛・松井考典；地球の哲学 2000年2月 PHP 研究所
- 2) 大塚柳太郎他；人類生態学 2002年3月 東京大学出版会
- 3) 地団研地学事典編集委員会；地学事典 昭和52年5月 平凡社
- 4) 松井考典他；地球環境論（岩波講座 地球惑星科学3）1996年11月 岩波書店
- 5) ASIT. K BISWAS HISTORY OF HYDROLOGY；1970年 NORTH-HOLLAND（141ページ引用）
- 6) 小林 徹；等身大の地球学 2003年6月 学文社
- 7) 高橋素晴；それから 平成9年8月 日刊スポーツ出版社